

音楽の意味や価値を創造する生徒の育成

I はじめに

現代は、AI技術の発達に伴い、新たな社会Society5.0時代を迎えている。こうした社会の中にあつてこそ、子どもたちが自らの人生を切り拓き、より良い社会を作り出していくことができるように、主体的・協働的な学びの中で課題を発見し解決していく力や、創造的な活動を通して新たな意味や価値を生み出し、より良い社会を創造していく力を育むことが期待されている。

今後さらに人間とAIが共存する社会が進展しても、人間特有の感性や想像力を働かせ、新たな意味や価値を生み出していくことが、豊かな生活や社会を創造していく力を育むことにつながり、特に音楽や音楽科の学習に求められているものであると考えた。

文部科学省が示した「Society5.0に向けた人材育成」において、これからの社会において求められる力として、「価値を見つけ生み出す感性や力、好奇心・探究力」を育むことが示されている。また、中央教育審議会において、「知性だけでは捉えられないことを、身体を通して、知性と感性を融合させながら捉えていくことが、他教科以上に芸術系教科・科目が担っている学びである」と強調されている。そして「豊かな感性や想像力を育むことは、あらゆる創造の源泉となるものであり芸術系教科等における学習（中略）を充実させていくこと」の必要性が述べられている。これらのことから、音楽科の学習において、価値を見つけ生み出す感性や想像力を働かせ、自分にとっての音楽の意味や価値を創造する力を育んでいくことが、実生活や実社会で新たな意味や価値を生み出していくことにつながり、これからのSociety5.0時代において求められているものであると考えた。

また、平成29年度学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」として、「生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、（中略）思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」が求められている。そして「音楽的な見方・考え方」^{注1)}を働かせるためには、音楽科の表現活動や鑑賞活動において、感性を働かせることが重要であると捉えた。

前研究シリーズでは、「思いや意図を表現する生徒が育つ音楽科の授業」を研究主題として実践を行なってきた。その結果、「表現のめあて」^{注2)}を何度も設定しながら、音楽表現を創意工夫しようとする姿が見られるようになった。しかしその一方で、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能が身につかず、楽曲分析を通して知覚・感受したことを音楽表現に生かせなかったり、音楽表現を創意工夫する前段階に技能面でつまづいてしまったりした結果、「表現のめあて」を決定していく過程において最後まで粘り強く取り組むことができない生徒が見られた。その原因として、一人一人の生徒の実態に応じた指導方法が不十分であったことが考えられる。生徒たちが音楽の意味や価値を創り出していくためには、生徒の実態を理解し、「表現のめあて」を決定していく過程において、「表現のめあて」を達成するために必要な知識・技能を身に付けさせるための指導を工夫する必要があると考えた。

以上のことから、「表現のめあて」を決定していく過程において、個に応じた指導を充実し、他者との協働的な学びの中で、音楽的な見方・考え方を働かせながら、鑑賞活動では、音楽の構造と曲想との関わりについて捉え、その曲の意味や価値について考えさせていく。そして表現活動では、それらを生かして、音楽表現を他者と協働しながら創意工夫していく。これらのことから音楽科で

は、音や音楽に対する思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、音や音楽のよさや美しさといった音楽の価値を創り出したりすることを深い学びとする。

そこで、本研究主題を「音楽の意味や価値を創造する生徒の育成」と設定した。

Ⅱ 研究の概要

1 音楽科の目指す生徒像

音楽の意味や価値を創造する生徒

「音楽の意味や価値を創造する」とは、自分にとっての思いや意図といった音楽の意味を創り出したり、よさや美しさといった音楽の価値を創り出したりすることができる生徒のことである。

2 育みたい資質・能力

音楽科における目指す生徒像に近づけるために、以下のような資質・能力を育む必要があると考えた。

「表現のめあて」を決定していく力

「『表現のめあて』を決定していく力」とは、音楽的な見方・考え方を働かせ、鑑賞活動において捉えたことを基に、音楽を形づくっている要素をどのように働かせて音楽表現するのかについて、創意工夫する過程で知識・技能を得たり生かしたりしながら決定していく力を指す。

この資質・能力を育んでいくことで、生徒たちは、音楽科が目指す生徒像に近づくことができると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

題材を「つかむ場」「つくる場」「ふりかえる場」の三つの場で構成し、授業を進め、「個別最適な学び」^{注3)}や「協働的な学び」^{注4)}の充実を図り、主体的・対話的で深い学びを実現していく。

「つかむ場」は、「つくる場」の教材に生かすための楽曲分析と、現時点で考える「表現のめあて」を設定する場である。始めに、本題材の課題や本題材で扱う音楽を形づくっている要素を確認し、本題材の見通しをもたせていく。また、題材で扱う音楽を形づくっている要素の数を学年や段階に応じて精選・調節していくことで、題材を通して適切に音楽的な見方・考え方を働かせられるようにしていく。生徒が学習の課題に対して見通しをもち、題材を通して音楽的な見方・考え方を働かせながら学習を進めていくことによって、学びの文脈にのせるとともに生徒の主体性を発揮させていく。楽曲分析では、「つくる場」で用いる楽曲や「つくる場」の教材に生かすことのできる楽曲を用いて、音楽を形づくっている要素とそれらの働きから生み出されて感受される特質や雰囲気と曲想との関わりについて、既習内容と関連させながら捉えさせていくことで、知識を精緻化させていく。また、班で分担したり、意見交流を図ったりしながら、協働的に学習を進めていくことで、様々な捉え方の違いを、実際に音楽を聴いて確かめながら気付かせていくとともに、それらを生かしながら、楽曲のもつよさや美しさを見出させていく。それから、鑑賞文を書かせたりプレゼンテーションをさせたりし、曲想と音楽を形づくっている要素との関わりをつかませていくことで知識を精緻化させ、「つかむ場」で学んだ知識を「つくる場」で生

かしていけるようにしていく。最後に一人ひとりに応じた「表現のめあて」を設定させる。その際、音楽を形づくっている要素の働きと曲想やイメージとの関わりが明確になるように促しながら、これからの学習が生徒自身にとって最適なものになるように「表現のめあて」を設定させていく。

「つくる場」は、「つかむ場」で設定した「表現のめあて」を基に、試行錯誤しながら、思いや意図を実現するための「表現のめあて」を決定し、音楽表現をする場である。始めに、「つかむ場」で設定した「表現のめあて」について、グループや全体で意見交換させ、どうすればより明確な思いや意図を音楽表現できるのかについて、個人やグループで試行錯誤しながら、音楽表現を工夫し、「表現のめあて」を再設定させていく。その際、生徒の実態に応じて、音楽表現の方法を選択させたり、ICT機器を活用させたりする等して、個別最適な学びを図っていくとともに、お互いに教え合ったり、問題点を全体で共有したりする等、協働的な学習を進めていくことで「表現のめあて」を達成するために必要な技能を身に付けさせていく。そして、ペアやグループで中間発表会を行い、音楽を形づくっている要素の働きが生かされた音楽表現であるか、より良い音楽表現はないかICT機器を活用して意見交換させることで、自らの音楽表現を振り返らせたり、多様な音楽表現の仕方に気付かせたりさせていく。また、ICT機器を活用し録音や録画した演奏を客観的に振り返らせることで、より明確な「表現のめあて」を決定させていく。

「ふりかえる場」は、最後に発表会を行い、「表現のめあて」をポイントにお互いの音楽表現を鑑賞し合うことによって、多様な音楽表現の方法に気付かせるとともに、それぞれの音楽表現のよさや美しさを感じ取らせていく。そして、自他の演奏を通して音楽を形づくっている要素の働きを「表現のめあて」の決定にどのように生かし、音楽表現を創意工夫することができたのかを振り返らせ、ワークシート（後掲資料1）に記述させる。そうすることで、音楽を形づくっている要素とその働きについて実感を伴いながら理解し、今後の音楽表現に生かせるようにさせていくことができると考える。

このように、三つの場で「個別最適な学び」や「協働的な学び」を充実させながら、主体的・対話的で深い学びを実現していくことで、音楽の意味や価値を創り出す生徒を育成することができる。

4 資質・能力が育まれたかの評価について

「『表現のめあて』を決定していく力」については、それぞれの場合ごとにおいて見取っていく。「つかむ場」では、本題材で扱う音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて理解することができているか、音楽のよさや美しさを捉えながら聴いているかについて見取る。「つくる場」では、音楽を形づくっている要素の働きを生かして、「表現のめあて」を決定することができているかについて見取る。「ふりかえる場」では、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な知識・技能を身に付けているかについて見取る。

5 研究の経緯

1年次では、「『表現のめあて』を決定していく力」を育むために設定した手立てが有効であるかを検証し、教科理論の構築を図った。「個別最適な学び」として、「表現のめあて」を決定していく過程において、音楽表現の方法を選択させたり、ICT機器を活用させたりしたことで、最後まで粘り強く取り組んだり、自分の技能に応じて繰り返し試行錯誤したりする姿が見られるよ

うになった。また「協働的な学び」として、ペアやグループで問題解決を図ったり、中間発表会を行ったりしたことで、友達の助言を参考に、自らの演奏を振り返りながら、より良い表現方法を模索しようとする姿が見られた。その結果、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能を身につけ、思いや意図をより明確にしながら、音楽の意味や価値を創り出すことができるようになってきた。しかし、題材で扱う音楽を形づくっている要素が精選しきれていなかったり、音楽を形づくっている要素の具体的な働かせ方を意識させられなかったりした結果、学びの文脈に乗り切れず、深い学びの実現へ到達できないこともあった。従って、題材で扱う音楽を形づくっている要素を焦点化して、生徒がよりそれらを意識しながら音楽表現を工夫させるための手立てが必要であると考えた。

そこで2年次は、題材で扱う音楽を形づくっている要素を学年や段階に応じて再度見直して設定し、思考する対象を焦点化し、学習のねらいを明確にすることで、生徒の主体性を発揮させていく。そして、「表現のめあて」を決定していく上で、課題に即した「具体的な工夫ポイント」を提示することで、学びの文脈にのせ、深い学びを実現できるように研究を進めた。その結果、題材で扱う音楽を形づくっている要素に焦点を当てて、より良い音楽表現について試行錯誤しようとする姿が見られた。そして、「具体的な工夫ポイント」に着目しながら、自らの表したい思いに合わせて、演奏や作品を工夫する姿が見られた。また、お互いの表現についてアドバイスをし合う場面においても、「具体的な工夫ポイント」を基に、より良い音楽表現について自らの演奏を振り返りながら、模索する姿も見られ、協働的な学びを促すことができた。よって、題材で扱う音楽を形づくっている要素を、具体的にどのように働かせて音楽表現するのかについて、主体性を発揮し、思いや意図を明確にしながら、深い学びを実現し、「表現のめあて」を決定していく力を育むことができた。

一方で、各題材で扱う要素が学年や段階に適しておらず、改善する余地のある題材があったことや、「具体的な工夫ポイント」の有効性を検証できなかった題材があったことが課題として残った。

6 最終年次のねらい

最終年次は、1年次の成果である「個別最適な学び」や「協働的な学び」を継続するとともに、各題材で扱う音楽を形づくっている要素を、さらに精選していく。そして、「具体的な工夫ポイント」を他の題材においても設定し、その有効性を検証していく。そうすることで、「『表現のめあて』を決定していく力」を育み、目指す生徒像に近づけたい。

Ⅲ おわりに

前研究シリーズでは、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能が身につかず「表現のめあて」を決定していく過程において、最後まで粘り強く取り組むことができない生徒が見られたことが課題として残った。

そこで本シリーズでは、「個別最適な学び」や「協働的な学び」を充実したことで、創意工夫して音楽表現するために最低限必要な知識・技能を身につけながら、「表現のめあて」を決定できるようになった。また、題材で扱う音楽を形づくっている要素を学習段階に応じて見直して設定し、課題に即した「具体的な工夫ポイント」を提示したことで、学びの文脈にのって、深い学

びを達成できるようになった。そして最終年次は、各題材で扱う音楽を形づくっている要素を、さらに精選し、課題に即した「具体的な工夫ポイント」を他の題材においても設定し、その有効性を検証した。その結果、他の題材においても「具体的な工夫ポイント」を基に、学びの文脈にのって思いや意図を明確にしながら、題材でねらいとする音楽の意味や価値を創造することができ、深い学びの実現に繋がったと考える。

以上のことから、育みたい資質・能力である「『表現のめあて』を決定していく力」が育まれたことで、目指す生徒像である「音楽の意味や価値を創造する生徒」の実現に近づくことができたと考える。

注1) 「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連づけること」と考えられる。

注2) 自己の思いや意図と、それを実現させるための表現の仕方(音楽の要素の働かせ方や奏法)について文章で書き表したものを指す。

注3) 多様な教材や音楽表現方法を提示して選択させることで、自らの学習を調整しながら粘り強く取り組ませたり、自らの学習が最適となるようにさせたりしていく学びのことを指す。

注4) 知覚・感受したことを共有し共感したり、考えを交流したりすることで、様々な捉え方や考え方を生かしたより良い音楽表現を創意工夫していく学びのことを指す。

引用文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年6月）解説－総則編－』東山書房、2017年、77ページ

参考文献

- 齊藤忠彦・菅裕『音楽科教育法』教育芸術社、2019年
- 小林洋子・沼田峰紀『音楽教育のススメ』幻冬舎、2021年
- 中島寿・高倉弘光・平野次郎『音楽の授業で大切なこと』東洋館出版社、2017年
- 増田謙太郎『音楽のユニバーサルデザイン』明治図書、2019年

課題：「音色」「テクスチャ」「構成」を工夫して、ボディーパーカッションでイメージに合ったリズムアンサンブルを創作しよう

	要素の働き	感じたこと
音 色		
テクスチャ		
構 成		

【評価】知・技 (A ・ B ・ C)

○具体的な工夫ポイント

- ①音の重ね方を工夫して、曲の始め方や終わり方、盛り上げ方や落ち着かせ方を工夫すること（テクスチャ）
- ②手拍子だけでなく、叩く部位や叩き方を工夫して音色に変化をもたせること
- ③構成（反復・変化・対照）を工夫して、曲にまとまりや変化をもたせること

○表現のめあて

	表したいイメージ	音色の工夫	テクスチャの工夫	構成の工夫
①				
②				
③				

【評価】思 (A ・ B ・ C)

○題材を振り返りましょう。

【評価】態 (A ・ B ・ C)

○グループのメンバーのリズム

	名前	リズム		名前	リズム
A			C		
B			D		

○曲名 ()

小節	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
A																
B																
C																
D																
メモ																
小節	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64
A																
B																
C																
D																
メモ																

【評価】知・技 (A ・ B ・ C)